



Title	衛生教育論のためのわが国の栄養問題の史的考察
Author(s)	藤森, 弘
Citation	大阪大学, 1969, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/29704">https://hdl.handle.net/11094/29704</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【 29 】

氏名・(本籍)	藤 森 弘 ふじ もり ひろし
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	第 1 6 4 8 号
学位授与の日付	昭 和 44 年 3 月 28 日
学位授与の要件	医 学 研 究 科 社 会 系 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位論文題目	衛生教育論のためのわが国の栄養問題の史的考察
論文審査委員	(主査) 教 授 丸 山 博 (副査) 教 授 関 悌四郎 教 授 田 中 武彦

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

現代文明によって、われわれの生活は、種々恩恵を与えられていることはいうまでもないが、その反面、種々の危険をも与えられていることはいなめない。衛生学は国民から、それらの危険をとりのぞき、破壊された生活をたてなおし、健康な生活をいかにしてうちたてるべきかについて、確かな方策をうちだすよう要求されている。即ちこの点をふまえた衛生教育の方法確立を要求されている。衛生教育の実践のためには、正しい現状分析と、一定の基準にもとづいた現状批判が必要である。生活を対象とする限り、その社会的、経済的な位置づけは勿論のこと、歴史的な発展のみちすじを無視しては現実に有効な方策をうちだすことはできない。

本論文は、以上の観点から、栄養問題に焦点をしばらくつつ、明治以降のわが国の国民生活の変遷に歴史的な考察を加え、衛生教育の方法確立に資することを意図したものである。

〔方法ならびに成績〕

著者は、栄養問題解明のために、衛生学独自の立場がなければならぬとした。それは、食物を徹視的にみて栄養素として人体生理上にはたす意義を究明する栄養化学、生化学を、また食物を巨視的にみて、農・漁・工業における生産物として社会生活における意義を究明する経済学をもふまえた立場であるとした。著者は、栄養問題とは食物を中心とした生活・労働問題であり、衛生学が栄養問題とかわかるとき、食べられる食物の質・量について充分の関心を払うことは勿論であるが、人間が食物をどう食べるかという点、すなわち食生活の様式に一層深い関心をもつものであるとした。

著者は、衛生学のこのような立場からみて、明治以降のわが国における栄養問題史を次のように時期区分し、各時期において、栄養を中心課題とする衛生教育がいかにこなわれたかをみた。

I) 明治前期(米食に対する批判とそれへの反論)：西洋文明の早激的移入。明治政府の富国強兵策

のもとで、蛋白質必要量論争を基礎に、最も有効なる兵食の確立をめぐる日本の食論争。脚気の病因探究開始。

Ⅱ) 明治後期(都市型の食生活様式のめばえ)：日本資本主義の発達にともなう人口の都市集中。日清、日露の対外戦争下の兵食改良。脚気対策の重点は軍隊より工場へ移行。

Ⅲ) 大正期(経済的集団栄養法確立へのとりくみ)：米騒動。第一次大戦中のドイツの食糧窮乏の体験。脚気病因論の確立。各種ビタミンの発見。過剰人口論と食糧問題。関東大震災。農民の食生活。栄養研究所設立。倉敷労働科学研究所設立。栄養士のはじまり。各種家計調査。

Ⅳ) 昭和戦前(食生活様式の総力戦体制へのくみこみ)：人口食糧問題。健民健兵。食糧自給対策。玄米、胚芽米、七分搗米論争。厚生省設置。国民栄養基準。食糧統制。

Ⅴ) 戦争：決戦食糧解決方策。栄養失調症。

Ⅵ) 昭和戦後(敗戦による食糧生産、流通機構の変化に伴う食生活様式の急激な変貌)：食糧の絶対的窮乏。占領政策と食糧。食糧メーデー。国民栄養調査。学校給食。生活保護基準。朝日訴訟。栄養改善法。黄変米。水俣病。中性洗剤毒性問題。いわゆる保健栄養剤の流行。いわゆるインスタント食品の流行。脱脂粉乳給食論争。農業基本法。いわゆるコールドチエイン。

#### 〔総括〕

①現在に至るまでのわが国の栄養問題史は、明治前期に移入された西洋食生活様式との接触において提起された日本食論争を主要な根幹として形成されてきた。それは日本食の最も基本的な要素である米食の肯定または否定の立場をめぐる論争であった。食糧自給の観点に立てば、わが国においては米食を完全に否定することができなかったことを歴史は示している。②米食と脚気との関連においてビタミン学説が成立した事情、その後の脚気対策の経緯の中に、現在われわれが直面している栄養観の歪みの原型を見ることができる。③最も有効な兵食確立という軍の要請は、日本における近代栄養研究の推進力であった。しかし、これは軍隊以外のあらゆる人間大集団に対する経済的集団栄養法の確立に通ずる。人間大集団に対しては、平均化された「標準値」をもって対策をたてるしかない。栄養必要量を例にとれば、歴史のさまざまな時期の社会的、経済的要因によって、「標準値」がしばしば「最低必要量」によっておきかえられてきたのを見ることができる。④衛生教育は、人間個体に対しては「養生訓」のような形で与えることができるが、しばしば、それはすべての生活資材が十分に獲得でき、しかも完全に自由選択しうることを前提とした生活における「養生訓」でしかなかった。

### 論文の審査結果の要旨

本論文は、歴史的な諸事実の関連から、現在の日本国民食生活様式の急激な変貌を、生活における合理化過程の究極の様相として明示し得た。

この成果は、将来の日本国民の健康な食生活の確立のために寄与するところが大きく、衛生学史的研究の空白を埋め得た画期的業績であると認める。